

海軍

小スンダ孤島での海軍医療

島根県 安井 稔

私は幼時父母を失い、三歳年上の兄と共に祖父母に養育されて成長しました。祖父母は農家で幼い私達兄弟の成長を心待ちに暮らしていました。

学校卒業後は近くの薬局に勤めていました。昭和十六（一九四一）年徴兵検査を受けましたが、その時徴募官の方から「お前は衛生兵要員だ」と囁かれました。その通り昭和十七年九月一日、呉海軍病院第四十九期普通科看護術練習生として入隊することになりました。

入隊時兄は既に軍務に服して出征中で、祖父母の心境を思うと忍び難いものがありますが、「君国のため」の一語に万事を断念して入隊しました。

入隊後三カ月の教育訓練は兵科の区別はありません、一般水兵の教育訓練で終始します。起床と同時のハンモックの片付け作業は背の低い私は毎日ビリで、罰として便所掃除に回されました。特に辛かったのが毎晩の精神修養棒による制裁です。連帯責任と称して誰か何かあれば、皆で整列して、太さ六センチぐらいの六角形の檜木棒で尻を、腫れ上がり紫色に変色するほど殴られるのです。時にはブツ倒れないように初めから物に結び付けブツ叩き続ける悪質な制裁もあり、上司からは禁止されていたらしいのですが、分隊上等の不在時をねらって制裁行事が毎晩続けられ、新兵達

には全く生き地獄の三カ月でした。

昭和十八年五月三十一日、同校普通科を終業し、翌六月一日には大竹海兵団医務科薬局に勤務することとなり転属を命ぜられました。ここの勤務は入隊前の薬局勤めと相通ずる所が多く、比較的に楽しく勤務することが出来ました。

翌十九年二月一日付で第九十六防空隊に転属を命ぜられました。この部隊は館山砲術学校医務科に所属していました。昭和十九年五月二日、三十隻の船団を組んで横須賀軍港を出港し、いよいよ戦地に向かうこととなりました。戦地の兄の消息も不明で祖父母もいよいよ老境に入り、家業のことでも不安な状態の中の出征は思い残すことは沢山胸中にありますが、万事天運に一任した思いの出征でした。門司港で船団を組んで、三十隻の大船団としていよいよ戦地へと向かうこととなりました。

乗船して船内で出港待機中に、鬼と言われた教班長が南方から帰還していて「君達は今から戦地へ渡航するのであるが、最近は目的地に渡航中、船団の中の十

隻のうち九隻が撃沈される状況である。元気で無事に目的地に到着することを祈る」と聞いて不安と緊張とが交錯して武者震いがしました。輸送船は「寿山丸」に乗船してニューギニアに向けて出航することになりました。

途中台湾海域において早くも敵潜水艦の襲撃を受けましたが、護衛の艦船が逸早くこれを察知、猛然たる反撃の艦砲射弾を浴びせ攻撃に転じ、これを撃退せしめ船団一同に安堵を与えました。

五月二十日、台湾高雄港に入港、高雄港からは船団三十隻が十隻づつに分散して行動することになりました。六月六日同港を出航、途中敵潜の襲撃もなく六月十五日に赤道を通過しました。

七月一日セレベス島メナドに入港。翌二日同港を出港し七月二十五日同船団の目的地ジャワ島スラバヤに入港し、船団の目的地無事到着を喜びました。

その翌日から漁船のような小さな船に乗り換えて島から島へと巡りながら小スンダ列島（ジャワ南海域）

に着きました。

この航海は二〇〇トンくらいの小さな船で二百人くらいの乗員であり、装備もない心細い船でしたが、幸い敵機の飛翔もなく、天候にも恵まれ、無難な航海でした。しかし上陸開始と同時に待っていたかのように敵機の大編隊が現れ、猛烈な空爆と、地上掃射を敢行してきました。

上陸した私達は慌てて地物を利用して爆撃と地上掃射に耐えながら敵機の去るのを待つ以外にありませんでした。敵機は原住民のスパイ通報により我々の行動を察知しつくしていたものです。この爆撃戦と機銃掃射のため、二十人ぐらいの戦友が犠牲になり戦死しました。私の医務科が内地から積載してきた大量の医療品その他も海の藻屑となったのです。このままでは医療活動ができないので緊急にスラバヤに連絡して、医療用品、薬品を補充してもらおうこととなりました。

この島は元オランダ領で、立派な洋風建築物もあり、部隊長はそこを本部として使用するつもりであったらしいのですが、激しい空襲の目標となるので予定

を変更して山の中に急造の兵舎を構築し、そこを本部としました。ここを拠点として毎日訓練や医療、治療にあたることとなりました。

兵舎は竹の柱に芭蕉の葉を覆った屋根、床板は大きな竹を平らに打ち砕いたものを使用、夜間就寝時はマラリアを予防するため蚊帳を用いました。気温は年中半袖シャツに半ズボンで生活出来るほど温暖ですから暮らし易い所です。食物は豊かで米は二期作で米食を充分補給が出来ましたが、味の方は内地の米と異なり不味いものでした。果物は南方にある各種の果物が採れ、おまけに蜜柑まで採れる土地柄です。

その後一回も空襲がなく平穩に過ぎましたが、補給の不便、戦況の推移等から私達の駐屯地は基地から遮断されて孤立してしまいました。そこで昭和二十年五月、スンダ列島から基地スラバヤに近いバリ島のデンパサールの第二警備隊に合流して陣地構築が行われることとなりましたが、ここで九月三十日に終戦が通達され、スラバヤのジャカルタ抑留キャンプに収容されることとなりました。

この抑留キャンプでは毎日のようにオランダ軍の使役でした。私は幸いに日本軍が占領当時、オランダ兵、原住民を含め治療活動を行っていた関係から顔なじみになっていましたので、使役に含まずと、お前は働かないでも良いと使役から除外してくれて助かったことです。

若いオランダ兵と片言交じりの会話で語り合っている時を楽しく過ごしたことも懐かしく思い出します。

昭和二十一年五月二十二日、ジャカルタ港を出港し六月五日、和歌山県田辺港に、夢に見た故国の土地をこの足で踏み締めることが出来ました。そして列車で大阪を経由して無事故郷に帰還することが出来ました。

兄がニューギニアで戦死したことを知らされ、大変なショックを受けました。生家を継ぐため兄嫁と結婚し働きました。近所の農家と語り合っただけで土木工事の下請仕事を、特に建築工事の基礎工事を中心に、農事の余暇を活用した副業を計画、積極的に推進し一生懸命働きました。当時の建築ブームの波に乗り農家

経済を潤し、子供達の教育費を助けました。

現在は子供達に守られ、幸せに老夫婦揃って元気で送っています。

私の海軍生活

戦艦「伊勢」と共に

兵庫県 池田 信雄

私は中国山地の森林王国と言われた、杉、檜の名木の産地、兵庫県多可郡杉原村で、農業と林業で生計をたてている家の末っ子として、大正十三（一九二四）年三月三十一日に生まれた。父は私が五歳の時死亡、母と十八歳年上の兄、姉が養蚕・水田で生計をたててくれていたが、この故郷は現在でも水質源を確保し、清い水を谷から海に流し入れ、下流の漁業者を潤わせている。

私が成長する頃は、支那事変もあり、郷里からは多くの青年が出征し大陸で戦っていた。このように時代